

発行人  
135-0047 東京都  
江東区富岡 1-17-1-403  
中島康夫  
TEL 03-3630-1927  
年二回発行

ホームページ  
忠臣蔵会館  
出版・校正・協力  
テレビ製作協力  
講演・史跡案内  
URL <http://www.12-14.jp/>

あれから308年

## 「井の中の蛙」

理事長 中島康夫

過日、機会があり、今暮れの十二月十八日封切り「最後の忠臣蔵」の試写会を拝見した。その内容は、史実とはかけ離れていたが、近年は映画作りがうまく、実に良く出来ていた。

それから間もなく、十月十六日封切りの「桜田門外ノ変」という幕末に大老井伊直弼が暗殺される映画も拝見した。

この映画は、地元の制作組合から声が挙がり実現した作品であるが、これまた、良く出来た映画で、この作品からは「元禄事件」を生涯のライフワークとしている小生にとって大いに参考になった次第である。

こちらの映画は、割と史実

に近づけて制作しているような感じを受けた。

「元禄事件」のみを研究していると、他面が見えず視野が狭くなっているのは自覚しているものの、同じ徳川幕府の要人が討たれたにしても、これも違うのかと思ひ知らされた。

井伊大老を襲った浪士が、事件後何年もの間追われ、あぐくの果てに捕縛され投獄、斬首となる。

大老の暗殺には、水戸の斉昭公ですら驚いたはずである。その結果、結局は自ら暗殺犯を捕縛する追っ手を出さなければならなくなった。

これを、元禄事件の浅野家に例えれば、生き残りの寺坂吉右衛門や四十七士の家族の詮議をするため、広島の浅野本家が追っ手や役人を派遣するということである。

しかし、事件後そのような動きは微塵も感じられなかった。

勿論、將軍の違い、その時の時世も違うとはいえ、余りの差異にさらに研究心に火が着いた感じである。

改めて、今後研究を仕直すことになるが、それにしても「元禄事件」のスマートな終わり方には他の事件と比べて超越感さえ感ずる。

- ・唯一人追われる者はいなかった。
- ・家族の家捜しもなかった。
- ・呼び出されて尋問される家族もいなかった。
- ・出資金の追求もなかった。
- ・関係者の尋問もなかった。
- ・討入り後、三時間も歩いての間、何の関与もなかった。
- ・それどころか、

- ・義士の子孫たちは、各藩に高禄を以て抱えられた。

この差は、何故か、今後改めて研究を進める人々にも、全ての媒体を使つてでも訴えなければならぬ。

「元禄事件」太平の時代とはいえ、綱吉のご乱行で人々は苦しめられ、己は過度のマザコンと衆道、実にバカバカしい時代であった。

幕末に「黒船」が来航、それにより多くの日本人は、自分たちの遅れに気が付いた。

小生にとって、今度の「桜田門外ノ変」の映画は正に「黒船」的存在であった。

この二つの事件を比べると、確かに、時代も異なり、將軍も違い、勿論その背景も違う。片や、大老井伊が殺され国論は二分されただけで、情やほのぼのとしたものには生まれなかった。ただの暗殺で終わってしまった。

大老が暗殺されず生きていたら、後二、三年は徳川の時代も続いただろうとか、という事ぐらいしか思ひ浮かばない。

一方、松之廊下事件、討入り事件は、ほとんどの国民に支持されて、三〇八年間現在まで語り継がれてきた。日本最多の芝居数をほこり、十二月十四日は、何万人もの人々が泉岳寺に足を運ぶ現象。それは、日本人が一番求める、義の現象である。我々も、今年もまた、泉岳寺で赤穂義士の法要を行い、一日中テントを張り「赤穂義士や忠臣蔵」の一般相談を受ける。その行事が、百年を過ぎたのである。

小生も「元禄事件研究」にたずさわって四十七年目になる。生涯現役で居たいが、早く気持ちのある人に全てを譲りたいと思っているが、中々、どうして研究に全てをかけている人に出くわさない。

## 小野寺十内妻丹女の墓地調査

副理事長 富岡 克

丹女三〇八回忌が祥月命日の平成二十二年六月十八日(行年四十五歳)に、中島理事長以下十名が参列し、了喜山林昌院の住職河上学詮師により厳修されたことは、別途、柿崎評議員が報告しているが、それに先立ち、昨年从今年の春にかけて丹女墓地の調査を行った。

丹女は小野寺一族(岡野、大高)の供養碑を七七日忌に西方寺(浄土宗)に建立し、現世の未練をすべて捨て、丹女の実家(灰方)の宗旨である法華宗に救いを求めて元禄十六年四月八日(お釈迦様の誕生日)に新築されたばかりの大本山本圀寺に入った。本圀寺(その頃寺門旺盛を極め塔頭は一〇一ヶ坊あり)において、朝夕亡き夫と縁者一族の後生を唱題(南無妙法蓮華経)祈りながらも、日ごとに氣力体力が薄れていき、実家(灰方氏)の縁寺でもあった本圀寺内塔頭の了覚院において同年六月十八日に亡くなり葬られた。

丹女の墓の右隣りには、(墓地図参照)林昌院の過去帳によると、調査に伺った時点で丹女の母として祀られている墓碑がある。(現在、林昌院では丹女妹いよの墓碑としている)

このお墓の被葬者については、元禄事件研究者の多くは、小野寺夫妻の養女で丹女の妹「いよ」として、墓石の正面は「妙珠院榮心日香信女 右側面は元禄十五年天四月二日、同左側面は施主灰方式」と刻まれていることから、当会の中島理事長は祀られた方が「いよ」であると断定するのはすこしばかり未解明なこともあり、今後の研究調査を待つ必要があるとの慎重な発言であった。

丹女の墳墓地(京都市下京区猪熊通五条下ル柿本町六七一 京都名家墳墓録)の現況は了覚院内(廃寺の時期は不明)の墓地に了覚院六世日行大徳之墓碑(正徳五年四月二十日 一七二五年)があり、また天明八年(一七八八年)の大火で旧本圀寺を始め塔頭もすべて焼失したが、同墓地内に十一世日良十二世日到的の墓碑があることから見て、了覚院は再建されたと考えられる。そして明治になってから、了覚院の後代の住持が本喜院の住持かのいずれかが継承してお墓を守り続けてきた。

但し明治四年(京都府が各社寺に指示した上知令)の寺地画図<sup>(1)</sup>には了覚院ではなく本喜院になっている。同図中に本喜院は明治三年閏十月自焼(敷地 東西三拾八間半 南北十一間 三百十九坪半)とあるが、平成二十二年現在の墓地の位置、面積とも同じで変わっていない。

明治十六年の本圀寺境内外区別実測図<sup>(1)</sup>では本喜院の跡地は畑地になっているが、墓地はそのまま残っている。

大正十一年の社寺境内外区別取調<sup>(1)</sup>では畑地(式百四拾七坪)で、その内墓地の面積は林昌院が永年お祀りして下さっている丹女の墓地(所有権登記墳墓地九〇㎡)と同一である。

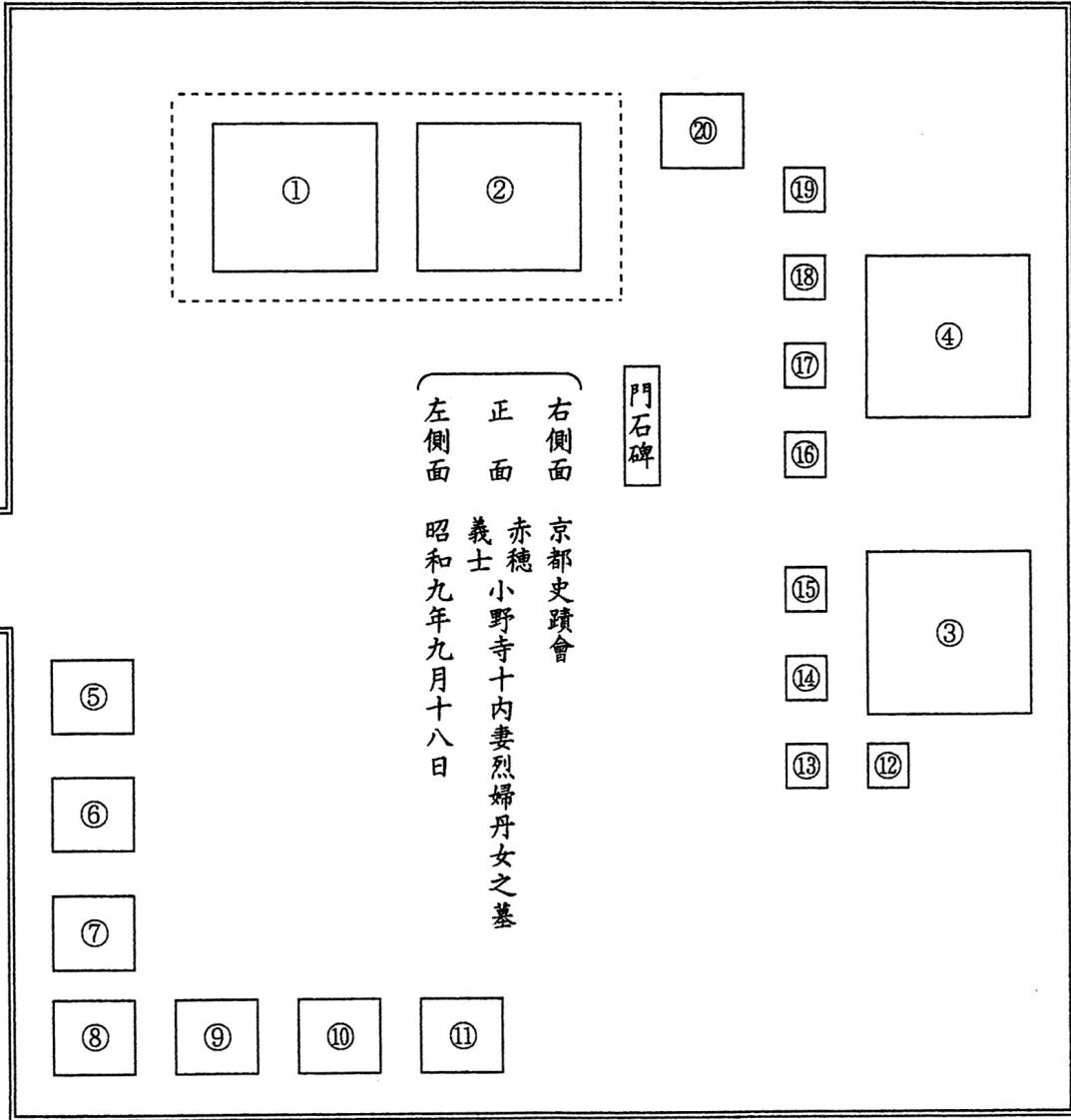
また明治四十年頃、富岡鉄斎により丹女の墓地の所在が世に紹介されている(徳島県立近代美術館「研究紀要 第六号」富岡鉄斎書簡 今泉氏宛)。

さらに日蓮宗大本山本圀寺の塔頭了覚院にあった丹女の墓は、寺がなくなり墓石だけ残り、詣る人もないので、鉄斎は臨済宗大徳寺派大本山大徳寺門外塔頭の瑞光院に改葬するようにと交渉している。しかし、地主が交渉に応じなかったため、浅野家と縁故の深い瑞光院に墓の土を移し「小野寺十内室丹子招魂碑」を建立した。

瑞光院は昭和三十七年に山科に移転したが、「丹子招魂碑」も移され同寺境内に今も残されている。

図にも示すように、この了覚院跡地の墓地には、丹女の外に加藤清正(旧本圀寺の寺域は四万參千坪あり 信長、秀吉、徳川の庇護もあり又清正も大檀越であった)の家臣で、肥後八代城主加藤正方(天正八年(一五八〇年)〜慶安元年(一六四八年)享年六十九)の家型墓と子孫の墓碑があり、さらに青木兵三郎(正方の死の翌日殉死)の家型墓も並存しているため、この墳墓地を宅地に整理する事が出来なかったことが幸いして、丹女の墓も元禄十六年に葬られたまま現在に残されたと考えられる。

(1)京都市立総合資料館



右側面 京都史蹟會  
 正面 赤穂 小野寺十内妻烈婦丹女之墓  
 左側面 義士 昭和九年九月十八日

門石碑

- ① 「丹女」之墓碑
- ② 「丹女ノ母」之墓碑
- ③ 「加藤右典厩正方」肥後八代城主之墓碑
- ④ 「青木兵三郎重成」之墓碑
- ⑤ 「後藤數馬則典」之墓碑
- ⑥ 「後藤數馬則典ノ妻」之墓碑
- ⑦ 「後藤奈右衛門則之」之墓碑
- ⑧ 「後藤數馬則典ノ娘？」之墓碑
- ⑨ 「十一世日良二和尚」之墓碑
- ⑩ 「了覚院六世了覚院日行大徳」之墓碑
- ⑪ 「遍具院日體聖人」之墓碑
- ⑫ 「朝香院日寛大徳」之墓碑
- ⑬ 「仙住院道意日明」之墓碑
- ⑭ 「妙讚宗吾六親法界」之墓碑
- ⑮ 「真淨院妙意日了」之墓碑
- ⑯ 「片岡氏可言具女」之墓碑
- ⑰ 「片岡清左衛門」之墓碑
- ⑱ 「九屋四郎兵衛」之墓碑
- ⑲ 「片岡〇言之」之墓碑
- ⑳ 「片岡左京源正厚」之墓碑
- ㉑ 「林氏」之墓碑

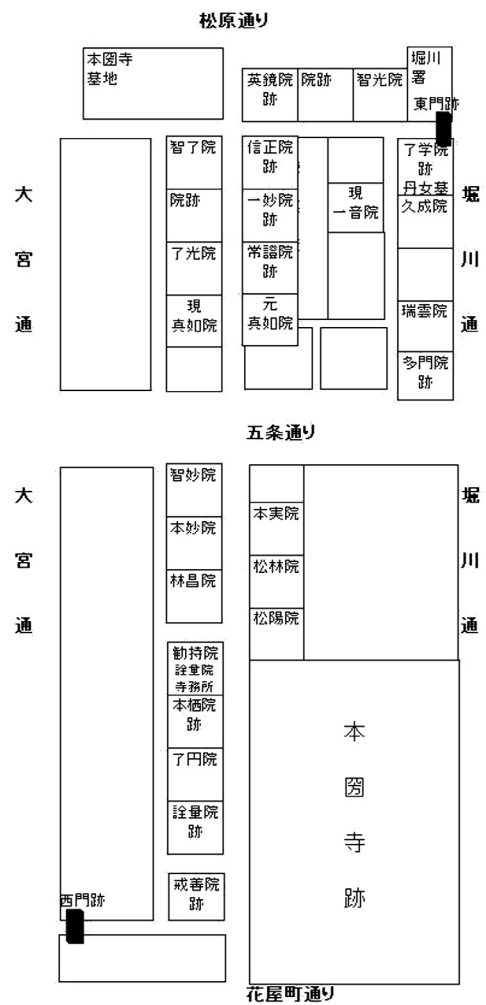
丹女墓地配置図 (林昌院様のご好意により掲載)



丹女墓地

うつつとも思はぬ内に夢さめて  
 妙なる法の華にのらむ  
 つまや子のまつらむものを急がまし  
 何かこの世に思いおくべき

辞世



明治末期の本圀寺塔頭配置 (推定)  
 (ホームページ 本圀寺塔頭より)